

● 東北 工藤 一郎

創立45周年を迎えた仙台フィルハーモニー管弦楽団。2006年から12年間に亘った常任指揮者＝パスカル・ヴェロの体制が終わった。最後となった3月の第316回定期はピアノに横山幸雄を迎えてフランス物一色。ヴェロが育んだ自発性、響きの豊かさ、色彩感、繊細な表現などが混然一体となり、この指揮者が印した足跡の大きさを改めて印象づけた。ヴェロは4月1日付けで仙台フィル初の桂冠指揮者となった。2018年度からの新体制は常任指揮者＝飯守泰次郎、レジデント・コンダクター＝高関健、指揮者＝角田鋼亮でスタート。ベートーヴェンを柱にした独逸系および東欧系の作品に照準を移す中、飯守が早速存在感を示して団内の人心を掌握した。

片や創立46周年を迎え、音楽監督・飯森範親（※仙台フィル常任は飯守、山響音楽監督は飯森）以下2人の首席客演指揮者＝鈴木秀美とラデク・パボラークを擁する山形交響楽団は、毎回意欲的な選曲で聴衆を引き付けている。ブルックナー「ミサ曲第2番」（第267回定期、指揮：飯森）とハイドン「天地創造」（第273回定期、指揮：鈴木）の秀演は、合唱音楽監督：佐々木正利率いる山響アマデウスコアの存在あってこそ。ウィリアム・ペリー「トランペット協奏曲」の日本初演（第272回定期、指揮：飯森）の大成功は同団首席：井上直樹の力量によるところ大。オッコ・カムを迎えたシベリウス「交響曲第2番」（第268回定期）は山響の歴史に残る名演となった。

2009年から広島市と山形市で交互開催され、山形では山響がホスト・オーケストラの大役を担ってきた「アフィニス夏の音楽祭」が最終回を迎えた（8月19日～26日）。セミナーや関連イベントを経た最終日には山響、セミナー参加者、講師陣による合同オーケストラがR.シュトラウス「ドン・ファン」、プロコフィエフ「ロミオとジュリエット」を熱演（指揮：秋山和慶、山形テルサホール）、有終の美を飾った。2019年からは開催地を新潟県長岡市に移す。

当年鑑2001年版の「東北」の頁に初登場した「amfあじがさわ（青森県）ミュージック・フェスティバル」は、その後開催地を北海道函館市に移していたが、2018年から「イカール国際ミュージックキャンプin Hachinohe」（主催：NPO法人日本アーツプロジェクト）となって東北圏に戻って来た。以後は当頁で扱うこととする。8月14日～20日の期間中、植田克己（ピアノ）、永峰高志（ヴァイオリン）、ドミトリー・フェイギン（チェロ）ら12名の一流講師陣のもと、計63名の受講生がソロや室内楽を学ぶとともに講師コンサートや修了コンサートで演奏の現場を体感した。

仙台の秋の風物詩「仙台クラシックフェスティバル（せんくら）」が第13回を迎え、9月28日～30日の3日間に行われた。有料87公演に83組384名のアーティストが出演し、他の関連事業を含めて延べ約38,600名のファンを集めた。出演者陣の中核を、仙台市が取り組んできた諸活動から輩出した人材が占めているのが特徴。今回は、仙台国際音楽コンクール（SIMC）の優勝および入賞者としてピアノのG・アンダローロ、津田裕也、北端祥人およびヴァイオリンの松山芽花、チャン・ユジン、成田達輝、岡本誠司。仙台フィルのコンマスとしては西江辰郎

（元）、神谷未穂、西本幸弘（現）。同団首席、元首席なども多数。仙台ジュニアオーケストラ出身者ではホルンの濱地宗と庄司雄大…等々。他に仙台市出身でヴァイオリンの大江馨。宮城県出身でピアノの及川浩治、N響クラリネット首席の伊藤圭ら。これらに長谷川陽子、福田進一、横山幸雄、館野泉らの常連・ベテラン・長老組も加わる一方、スタート時からの初心者や幼児向けのコマも確保されていて、幅広い客層の支持を集めている。

仙台市のもう一つの大規模イベントは2001年スタートで3年毎開催の「仙台国際音楽コンクール（SIMC）」だ。2019年の第7回が迫り、出場者の募集や関連企画の開催が始まった。内、出場申込者数はヴァイオリン、ピアノ両部門合わせて467人と過去最高となっている。

「仙台オペラ協会第43回公演」（9月1・2日、東京エレクトロンホール宮城／芸術監督：佐藤淳一／演出：伊藤み弥／指揮：佐藤寿一、仙台フィル他）は、プッチーニ「修道女アンジェリカ」とマスカーニ「カヴァレリア・ルスティカーナ」。多くの点で対照的な2つのヴェリズモオペラを地元ゆかりのキャスト中心で固め、長年の蓄積を踏まえつつ意欲を示した。

2014年にスタートした室内楽シリーズ「Music from PaToNa」〔主催：仙台市宮城野区文化センター他／監修：三宅進（仙台フィル・ソロ首席チェロ）／プランナー：西沢澄博（同・首席オーボエ）、助川龍（同・首席コントラバス）〕が、厚い客層を築いて好調裏に継続中。近年、これをヒントにした室内楽シリーズ「Music from Bun-Sho-Kan」〔主催：文翔館室内楽シリーズ実行委員会／監修：ヤネネ館野（山響第2ヴァイオリン首席）、小川和久（山響チェロ首席）〕が山形市でも行われている。

2011年3月26日、仙台フィルが見瑞寺で行ったコンサートを初回とする「復興コンサート」はなおも継続開催中で、2018年末に800回を超えた。これを主催する「音楽の力による復興センター東北」は、新音楽ホールの建設を求める「市民会議」の活動に協力する他、「音楽ホール建設基金」の管理団体にもなっている。

コンサートに子供対象のイベントやワークショップを付随させ、未来へ踏み出すきっかけを与えようとする活動が回を重ねている。内、ピアニスト・小山実穂恵プロデュースの「こどもの夢ひろば“ボレロ”」は4回目となった（7月31日・8月1日、日立システムズホール仙台／指揮：広上淳一、管弦楽：東京音楽大学学生を中心とした混成オーケストラ）。同趣旨のワークショップを付随させているのが仙台フィル・コンマス西本幸弘のリサイタルシリーズ「VIOLIN able ～ディスカヴァリー～」。リサイタルはvol.5となり（12月7日、PaToNaホール／ピアノ：北端祥人）技量、精神ともに充実ぶりを示した。

作曲界では、仙台フィル副理事長でもある片岡良和の管弦楽作品を集めた「片岡良和作品展」が大規模に行われた（4月17日、東京エレクトロンホール宮城。指揮：岩村力、管弦楽：仙台フィル、ソプラノ：齋藤翠）。没後10年を機に行われたのが「本間雅夫の音楽'18」（10月14日、仙台市シルバーセンター・交流ホール）。器楽曲と声楽曲計11曲が演奏され、本間の存在の大きさを改めて印象づけた。東北の若い世代の作品を募集してプロの演奏家が演奏する「ヤングコンポーザーコンサートin東北」（主催：同実行委員会）は2回目となった（8月19日、名取市文化会館中ホール）。

オペラ「鳴砂（なりすな）」はじめ多数の作品を遺し、仙台放送合唱団音楽監督を務めた岡崎光治氏（83歳）と、音楽教育者で福島コダーイ合唱団を創設し、その音楽監督を務めた降矢美彌子氏（75歳）が逝去された。ご冥福をお祈りする。